

氏 名	山崎 成美 (ヤマサキ ナルミ)
学位の種類	博士 (造形)
学位記番号	博第 22 号
学位授与日	平成 29 年 3 月 2 日
学位授与の要件	学位規則第 3 条第 1 項第 3 号該当
論文題目	環境としての作品 —パウル・クレーの作品に見る環境の転移/転位について—
審査委員	主査 武蔵野美術大学 教授 戸谷 成雄 副査 武蔵野美術大学 教授 田中 正之 副査 武蔵野美術大学 教授 伊藤 誠 副査 武蔵野美術大学 客員教授 岡崎 乾二郎 副査 東京国立近代美術館研究員 三輪 健仁

内 容 の 要 旨

この論文では、絵画を一つの環境として捉えなおした作家としてパウル・クレーを扱う。絵画を一つの環境として捉えなおすことが、クレーの制作の核心にあったと考える。絵画という環境は、画面上に表れた線や色、絵具だけで作られているわけではない。支持体や絵具といった物理的環境と、それらを関連付けていく法則や画家の思考などがネットワークのように絡み合う一つの環境、それが絵画である。

我々は通常、絵画という環境から育まれた果実、つまり図像のみを選択し鑑賞している。だが、クレーは絵画の表面に現れる形態だけではなく、それを育んだプロセスも含めて、絵画の全体を見ることを重視する。クレーにとって、絵画を制作することは、絵画の中の様々な繋がりを組織することであり、いわば一つの環境を構築することであった。

絵画に対するクレーのこうした考え方は、クレーの形態観を反映している。クレーは形態をプロセスの積み重ねの中で生成変化を繰り返していく、一瞬の現象として捉えていた。その上で、クレーは新しい形態や画面の表情に差異が生まれることを、プロセスの差異すなわち環境の差異と捉えた。クレーは多様なスタイルで作品を生み出したことが知られているが、それは環境の多様さを表していると言える。

具体的には、クレーの作品のうち、絵画に異なる環境が転移 / 転位される構造を持つ作品を分析する。クレーの造形思考の核心に、芸術制作を種子の摘播のように、環境に別の環境因子を移し、絵画の諸要素と関連付けて展開するという思考があったと捉えなおす。二つの異なる環境が出会うとき、環境の葛藤と調和がユニークな形態として生成され目の前に現れる。そこに、その造形作品の中にしか生まれなかった、唯一性をもった出来事としての表現が生まれてくるという考え方である。

以上の視点を前提に、クレーの作品方法の革新性を「環境の転移 / 転位」に見る。クレーの作品を見渡すと、転移 / 転位の方法は、画像、主題の移し替えそして技法の転用、メディアウムの特性と構造の転移 / 転位、さらに自然の生成プロセスの絵画への転移 / 転位までが行われている。

この論文では、環境の転移 / 転位が、クレーの絵画に多様な表情を与えるための手段の一つとなったことを明らかにするとともに、環境の転移 / 転位が、写実とは異なる対象へのアプローチ方法であること、そして、各メディアウムの境界を超えて、対象となった環境を潜在的に生存させる方法であることを論じるものである。

第1章では、初期作品であるガラス絵の分析を通し、異なるメディアウム間での技術や表現特性の転移 / 転位を扱う。環境の転移 / 転位は既にクレーの初期作品に見出せる。クレーが、各メディアウムの要素を抽出し、絵画の諸要素の組み合わせと関連付け、絵画への転移 / 転位を可能にしていることを明らかにする。

環境の転移 / 転位は、対象や絵画を関係性の束、すなわち環境として考えるからこそ可能となるが、絵画を環境と捉える発想は、クレーの形態に対する独特な考え方に由来する。そしてその祖型はゲーテに見いだせる。第2章でははじめに、クレーの形態観と、環境を作ることで形態の差異を生み出すという発想が、ゲーテに由来することを論じる。

続いて、植物を絵画に転移 / 転位するという視点からクレーの植物へのアプローチを考察する。クレーの形態観からすれば、植物は、自然の中でたえず形態を変化させていくものであり、理想的モデルである。形態が生成されるプロセスに関心が強かったクレーにとって、自然の法則を研究し制作に取り入れることは自然の成り行きであった。

第2章では具体的には、クレーが植物の形態そのものをどのように描いているかを分析し、次に光、土壌といった植物を育む条件を表現するアプローチを考察する。そして最後に、絵画という環境にふさわしい植物の生成とは何かという視点から作品の分析を行う。クレーは、第1章における異なるメディアウム間における転移 / 転位と同様に、植物を描く場合にも、植物とそれを育む自然から、要素や法則を抽出し、絵画に転移 / 転位させて、絵画における自然の再生を試みている。そうした自然から絵画への転移 / 転位は絵画での多様な植物の表現を可能にしているのである。

第3章では、環境の転移 / 転位が見られるクレーの作品と、シュルレアリスムの技法であるコラージュ、デペイズマンとの間で、絵画と他の環境とのつながり方の比較検討を行なう。クレーの手法は、コラージュと異なり、背景とみなされてきた地、環境そのものの接合、転移 / 転位を行っていたことに特徴がある。マックス・エルンスト《主の寝室》との比較により、クレーの手法にある、既存の空間の転移可能性、変容可能性について論じる。

補論では、クレーの方法を敷衍させた作家としてエヴァ・ヘス、筆者の作品を論じ、環境としての作品と作家、鑑賞者との関係について考察する。

審査結果の要旨

●論文の概要

本論文は、20世紀を代表する画家のひとりであるパウル・クレーの作品を「環境」という観点から分析し、その制作の様相を明らかにしたものである。さらに補論においては、エヴァ・ヘストと学位申請者である山崎成美自身の作品が扱われ、論文と制作との関連についても論じられている。

本論文の主要な議論は、絵画作品をひとつの「環境」と捉えたうえで、クレーにおける異なる環境間の「転移／転位」をめぐってなされており、そこに申請者のオリジナルな視点がある。山崎によれば、絵画を「環境」として捉えなおすこととは、支持体や絵具といった物理的要素のみならず、それらを関連付けるための法則や画家自身の思考といった要素がひとつの総体へと編まれたものとして作品を考えることである。そのため「環境」は、絵画作品を作り出している諸要素の集まりとして、論文の中では「関係性の束」といった表現で言い換えられてもいる。「関係性の束」を編む過程が「環境の形成」であり、山崎はそのような制作プロセスを重視する。そして、諸要素のつながりを組織することがクレーの制作の核心であったと指摘し、彼の作品における形態の発生、あるいはイメージの成立の諸相に検討が加えられている。こうした考察から浮かび上がってくるのは、絵画における表象を、描写などのある種の図像化としてではなく、ある特定の環境内での自律的とも思える形態発生や、ひとつの環境を別の環境へと移しかえたり接合したりする作業を通して起こる形態発生というイメージ生成のあり方である。山崎は、そこにクレーの作品の革新性を見出している。

クレー作品における作画プロセスの詳細な分析を通じて、イメージの生成の問題について考察した本論文は、作品制作を専門領域とする学位の申請者ならではの視点の基づいており、非常に意欲的な論考であったと言える。

●論文の構成

論文は以下のような構成となっている。

序論

第1章 メディウム間の転移／転位——ガラス絵への転用

第1節 ガラス絵

- (1) エッチングの技法のガラス絵への転用
- (2) 黒いガラス絵

第2節 メディウム間の転移／転位

- (1) 版画的線描を紙に移す
- (2) ガラスという環境を紙に移す

——ガラスの表現特性の紙作品での転移／転位

(3) ステンドグラスの表現特性を絵画へ移す

まとめ

第2章 クレーの作品に見る自然を移す

第1節 環境の転移／転位と環境としての絵画——環境の転移／転位

(1) クレーの環境の転移／転位と絵画に対する考え方

(2) クレーの形態観はゲーテの形態観の発展である

第2節 絵画という環境に自然を移す

(1) 植物から関係性を抽出し形態を描く

(2) 多様な植物の創造

(3) 植物が育まれる諸条件の転移／転位について

(4) 形態と環境との一致を求めて①——分節のスタイル

(5) 形態と環境との一致を求めて②——深化する自然の転移／転位

(6) 植物を絵画に移すことの到達点

まとめ

第3章 環境の転移／転位により生じる空間について——環境の転移／転位とシュルレアリスムの技法との比較

まとめ

結論

補論 環境の接合をめぐる

第1節 エヴァ・ヘス

第2節 筆者の作品について

まとめ

第1章では、ガラス絵における「環境」を、エッチングやドライポイントといった異なるメディウムの「環境」へと「転移／転位」させているクレー作品や、ステンドグラスを油画へと「転移／転位」させている作品などが取り上げられ、それぞれの作品におけるイメージの成立が分析されている。第2章では、クレーの作品において、植物が生育する自然の「環境」(光や土壌など)が絵画という「環境」のなかに「転移／転位」されていることが指摘され、植物が生成するような形態の発生の問題が、ゲーテの形態論からの影響に言及しながら考察されている。第3章では、クレーの作品における「環境の接合」を、シュルレアリスムのデペイズマンやマックス・エルンストの《主の寝室》に代表されるようなコラージュといった技法と比較したうえで、シュルレアリスムとは異なるクレーにおける「環境の接合」とそれによる「空間の変容」が明らかにされている。補論では、クレーと同様に作品を「環境」として捉えていたと山崎が考える作家であるエヴァ・ヘスについて論じられ、クレーとの大きな差異として、そこには作者や鑑賞者の身体が考慮されていることが指摘されている。山崎自身の作品に関しては、皮と紙という要素を持ったふたつ

の異なる「環境」間の接合について論じられている。

●論文の成果

絵画を作画の過程から分析することを通してその表象のあり方を明らかにしようとする場合、通常のイメージ研究では、たとえば線、色彩、支持体や顔料の物理的特性、図と地といった観点によって分析されるのが一般的である。また表象としての様相も、再現的描写（あるいはそこからの逸脱）や図像として考察されることが多い。山崎の論文は、「論文の概要」の項で記したように「環境」とその「転移／転位」という語彙を用いて作品を分析している点にオリジナリティがあり、それが本論文の最大の成果である。クレーの作品に関しては、用いる支持体や技法の多様性についてこれまで多くの研究がなされてきたが、そのような作品の構成（構造）を腑分けするかのように分析する方法ではなく、作品のありよう全体を総体的に捉えて解釈しようとしている点も独自のアプローチであり、クレー作品を理解するための新たな可能性を開いたことも大きな成果だと言える。

●審査の経緯と結果

博士論文の審査当日にはまず公聴会を開き、続いて審査委員会を開催した。審査委員会では、公聴会での発表および質疑応答を踏まえて、申請者への審査委員による質疑応答を引き続き行い、申請者が退席後、審議のうえで最終的に合否を判定した。

公聴会では、申請者より論文の概要がスライドを用いて発表され、それに続けて公聴会会場に展示された作品のコンセプトについて説明された。発表後の質疑応答においては、たとえば第一章で論じられているメディア間の「転移／転位」（エッチングとガラス絵）について、それを弁証法的関係として捉えることもできるのではないか、という本論文の本質的な問題に関わる重要な質問がなされた。また、論文で議論された論点と山崎自身の実制作の関わりについての質問もなされた。これらの質問に対する申請者の回答は、必ずしも十分なものとはいえず、そのため公聴会後の審査委員会では、これらの質問に対する回答を改めて求め、申請者から詳細な説明がなされた。

以上のような質疑応答と審査を経て、最終的には審査委員全員一致で、本論文の意義と価値を認め、博士号の学位にふさわしい学術的レベルを有するものと判断し、合格と判定した。また審査委員会では、作品制作領域においてこれまでに提出されたどの博士論文と比べてもとりわけ完成度が高い論文であったという指摘が数名の審査委員からあったことも付言しておきたい。



展示風景 2014年



ネーベル

2011年 紙、麻紐、ニス、墨、ハトメ 2130 × 1600 × 115mm



unknown

2014年 紙、麻紐、染料、油絵具、羊皮紙 1290 × 1160 × 80mm



リユーバ

2013年 紙、木、ニス、染料 972 × 484 × 470mm



Hands

2012年 紙、染料、ニス、墨 400 × 530 × 22mm



フチコマ

2013年 紙、羊皮紙、ニス、染料、麻紐 1540 × 273 × 204mm